

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

太宰治『千代女』論：スポイルされた少女の言説

著者	櫻田 俊子
出版者	法政大学国文学会
雑誌名	日本文学誌要
巻	73
ページ	89-98
発行年	2006-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/9380

太宰治『千代女』論—スポイルされた少女の言説—

櫻 田 俊 子

はじめに

『千代女』（昭和十六年）は、十九歳の「和子」が独白する形式で書かれている。女性の独白という形式の作品は、主に昭和十四年～十七年に集中しており、創作集『女性』（昭和十七年）に収録されている。私見では、女性による独白の形式の作品群は、作品間において、モチーフや表現上、関連性があるものが見受けられる。例えば、女子学生の日を描いた『女生徒』のモチーフの一つを抽出し、状況を徹底的に追求したものが『待つ』（昭和十九年）と言える。また、『女生徒』と、直接的な意味で統編的な内容を持つのが『俗天使』（昭和十五年）である。私は考える。『俗天使』は、作家の「私」が、作品中に「小説でも書いてみよう」として、女性の一人称独白の形式で作品が形成される。その内容は、『女生徒』の素材となった日記の

提供者有明淑の手紙の引用と思われるものが、「作品」として「創作」されている。この『俗天使』の手紙部分と語り手の意識の在り方の点で共通するのが『千代女』である。先行研究において、

後の「千代女」が「書けなくなった女学生」を扱っているのには、「女生徒」の発表が有明家の人々に与えた影響も関係しているかも知れない。

（『女生徒』—可憐で、魅力があり、少しは高貴でもある少女—『國文學 解釈と教材の研究』平成十一年）

との根岸泰子氏の指摘がある。この点に関し、私は、加えて述べれば、『俗天使』は、その手紙部分に見られる、有明の不安定さと「書けなくなった」少女という意味において『女生徒』から『千代女』につながっていく作品であると考えている。ま

た、『千代女』発表の後約六年を経て発表された『斜陽』（昭和二十二年）は、語り手の名前が「かず子」である点で『千代女』と関連があると私は考える。『斜陽』は、大人になった女性を描いたという意味において、女性の独白体の集大成といえるのではないか。

本稿は、「書けなくなった」少女、そしてスポイルされた少女の言説という観点から『千代女』の問題を考察する。

一 『千代女』の問題点―先行研究を視座として

『千代女』で語り手の「私」＝「和子」が語る内容は、小学校の時、綴方が二等に当選して以来の回想である。女学校を卒業した現在、「私」は才能がないと感じている。これまで、『千代女』は、主に作品末の「私は、今に気が狂うかも知れませんが」に注目され取り上げられてきたように見受けられる。たとえば、木村小夜氏は、

結局和子が陥っていたのは、他者の評価によってしか自分の才能を自覚出来ない不幸、それゆえに不当な評価を受けたために才能に自信がもてなくなった、しかしだからと言って、自分の才能を意識していなかった状態にはもはや戻れない、という不幸であった。

（『太宰治「千代女」論―回想のありかたを中心に―』
『奈良女子大学大学院人間文化研究科年報6』一九九一年）

と述べ、千田洋幸氏は、

綴方に対する距離の如何によって自己のアイデンティティを形成している「私」は、彼らが発語する言葉の網の目から逃れることができないし、またそのことを意識化することもできない。この意味で、「千代女」は、ひとりの女性を「教育」する複数の男を配置することによって、彼女ら「父」たちの言葉が、彼女の言葉を領有しつくしていくプロセスについて語ろうとする物語なのだといえるだろう。

（『千代女』の言説をめぐって―自壊する女語り―
『国文学』平成十一年）

として、

このテキストは、一見「男性」的な言語を脱構築するかわような「女語り」という方法それ自体が、じつは男性中心的なイデオロギーの産物にはならない、という逆説を、読者の前につきつけてみせるのである。

との見解を示している。また、柴田順一氏は、

滑稽な語りの文体を背景にいわば「自虐」のエロチシズムが流れているのである。（略）作家太宰治にとって女性独白体の作品を書くこと、すなわち女性の（と太宰が考える）ことばで書くことないしはそれをまねて（と太宰が考え

て)書くことには、いわば観念的な性転換というべきものにともなうある種の快楽がなかったとはいえないであろう。いうまでもなく、その快楽とはたぶんエロチックなものを含んでいたはずである。(略)あたりまえのことだが確認しておけば、そのエロチシズムとはいわば太宰だけのものではなく、われわれ読者のものでもあることはいうまでもない。さらに蛇足を重ねれば、男性の読者でも女性の読者でもある。女性であろうが男性であろうがわれわれ読者は、そこで観念的な性転換というできごとに出会うからである。

(「千代女」から女性独白体へ、そして太宰治へ)

『太宰治研究7』 平成十二年 和泉書院

と述べている。

木村氏の指摘同様、語り手「和子」の状態は、「分裂」と「矛盾」を孕んでいると私は捉える。その状態は、「和子」自ら「気が狂うかもしれない」と述べているように、「狂気」に近いほどのものであると私も考える。しかし、私は、「分裂」と「矛盾」を「不幸」と解釈するより、混乱している状態そのものに着目したい。すなわち自己が他者によって評価され、自己を意識した結果、振る舞いが作爲的になり、「自分を駄目だと思」う点に問題があると考ええる。「和子」は、自己の、本来持っていた自然な在り様(他者に意味づけされる以前の自己)を望みながら(意識しなかった自然の状態で在りたいと望みながら)も、他者の望むような自己で在ろうとする(他者から評価され

た自己を保持しよう)としているのではないか。

また、千田氏の論に対しては、作品で描かれているのは、「男性」「女性」といったジェンダー的な主題ではないと私は考える。和子を取り巻く存在を「男」と捉えるよりはむしろ大人、他者と捉えた方が適切ではないか。語り手「私」の母親の存在もあることを見落とせない。

柴田氏の「自虐」の「エロチシズム」や「観念的な性転換」に「出会う」点に関しては、そのようには言えないのではないかとというのが私の見解である。太宰作品におけるいわゆる一人称独白体(女性による一人語り)の形式は、読者に「性転換」的「エロチシズム」を与えるのが意図ではないと考える。

「和子」の言説は、他者によって自己確立を無理矢理強制させられ、おのずと他者が望む「私」を演じざるを得ない、アイデンティティを獲得する前に、他者によって与えられたアイデンティティを模倣し、それからはずれないように生きざるを得ない困惑であり、その意味でこの作品はスポイルされた少女の言説といえる。と私は捉えている。次の章で、作品を詳しく見て論拠を示す。

二 スポイルされた少女の言説

『千代女』のタイトルは、作品中の、語り手「私」＝「和子」に対して、その母親が述べるエピソードに由来しているものである。そのエピソードとは、「むかし加賀の千代女が、はじめてお師匠さんのところへ俳句を教わりに行った時、まず、ほと

どきすという題で作って見よと言われ、早速さまざま作ってお師匠さんにお見せしたのだが、お師匠さんは、これでよろしいとはおっしゃらなかった、それでね、千代女は一晩ねむらずに考えて、ふと気が附いたら夜が明けていたので、何心なく、ほととぎす、ほととぎすとして明けにけり、と書いてお師匠さんにお見せしたら、千代女でかした！ とはじめて褒められた」というものだ。母親は、「和子」に、「根気が無いからいけません」とこの話を持ち出した後もう一度、「何事にも根気が必要です」と念を押すように述べていることから、母親は「根気」を説くために、この話を持ち出したものと想定される。しかし、このエピソードは、「根気」という側面の他に「感じたことをそのまま書く」という意味にも解釈する事が可能である。

『千代女』というタイトルの付け方は、『女生徒』と同様の手法である。作品内はあくまでも独白の形で完結しながら、タイトルは、客観的に第三者から見たもので語り手をパッケージング（ラベル貼り）している。本来ならば、誰も知らない一少女のつぶやき『女生徒』の場合は、一日が現在形で描かれ、『千代女』の場合は、現在から過去を振り返り、内省、回想という形式をとっているが、作中で語る「私」を客観的に見たタイトルといえよう。

語り手「和子」は、自己確定の混乱にある。他者からおしつけられた評価「和子は結局は、小説家になるより他に仕様のない女なのだ、こんなに、へんに頭のいい子は、とても、ふつうのお嫁さんにはなれない、すべてをあきらめて、芸術の道に精進するより他は無いんだ」等という、「叔父さんの悪魔のよう

な予言」を、「死ぬほど強く憎んでいながら、或いはそうかも知れぬと心の隅で、こっそり肯定しているところもあるのです。」と、揺れる心情を吐露している。最後は自分のこれまでを回想し、再び、冒頭の言葉を繰り返し「私は、だめな女です。きつと頭が悪いのです。自分で自分が、わからなくなってきた。」と述べる。これは、冒頭「女は、やつぱり、駄目なものなのね。」に対応しており、読者は、現在語り手の「和子」が立たされている地点へ再び戻られ「和子」の心情を確認させられる。

冒頭部「自分の頭に錆びた鍋でも被っているような、とつても重くするしい、やり切れないものを感じて居ります。」と、結末部に「それこそ頭に錆びた鍋でも被っているような、とつてもやり切れない気持だけです。」と繰り返される「それこそ頭に錆びた鍋でも被っているような」という表現は、「和子」が置かれている状況を端的に表している。「頭」「観念」「錆びた」「古い」「鍋」「固い物、既成の価値観、人から押しつけられたもの、日常的な物の象徴と考えれば、和子が感じている」とつても重くするしい」「やり切れないさ」は、他者によって押しつけられたアイデンティティへの疑問と、顕在化されない反発である。

また、「どうしたら、小説が上手になれるだろうか。」の言葉に注目してみると、「和子」が綴方から小説の書き手として自身を捉えていることが分かる。本来、綴方と小説は性質を異にしたものと考えられるのであるが、作品内において「和子」や周囲は、同一化し混同している。母親が持ち出した加賀の千代

女のエピソードは、綴り方Ⅱ作文、ありのままを描く自然主義的な観点、小説Ⅱ虚構、の二項対立とも解釈可能である。二項対立と述べたが、逆を返せば、綴方と小説は、言語化の過程においては共通して物語化を免れ得ない。物語られる時点で既に語り手によって取捨選択が行われているのである。「いまこそ私は、いつか叔父さんに教えられたように私の見た事、感じた事をありのままに書いて神様にお詫びしたいとも思うのですが、私には、その勇気がありません。いいえ、才能が無いのです。」と述べる「和子」は、この綴方の持つ小説的な側面、物語、虚構化の問題に接近しているのである。この点からすれば、「和子」の混乱は至極正当な真摯なものである。この点に関してはのちに、作者の自意識でもう一度触れるとし、作品に影響があると考えられる当時の生活綴方運動の問題を次の章で述べたい。

三 「和子」と豊田正子——『千代女』と生活綴方運動

『千代女』において見逃せないのは、生活綴方運動に関する言及である。作中に出てくる綴方に関連する事項は、呼称を少し変更したのみで、「寺田まさ子」→豊田正子、「青い鳥」→赤い鳥、「金沢ふみ子」→野沢富美子と、実在した雑誌、人物名である。作品発表時には、作品を読んだほとんどの人が想起できたであろう名称になっている。

時代的な背景を鑑みると、昭和十二年『綴方教室』が発行され、昭和十四年には『続綴方教室』が発行されている。生活綴

方運動が盛んだった時期に重なっている。「寺田まさ子」のモデルと想起できる豊田正子であるが、その綴方「つづり方」には、綴方「うさぎ」で当時の思った事を書いたら、その「うさぎ」に対する批評を受けたり、雑誌に載った事により、モデル問題で周囲に責められたことを書いている。綴方が「赤い鳥」発表になってからの、豊田自身の困惑が示されており、『千代女』の「和子」が持つ問題「十二の時に、柏木の叔父さんが、私の綴方を「青い鳥」に投書して下さって、それが一等に当選し、選者の偉い先生が、恐ろしいくらいに褒めて下さって、それから私は、駄目になりました。あの時の綴方は、恥ずかしい。あんなのが、本当に、いいのでしょうか。どこが、いったい、よかったのでしょうか。」という困惑や、「和子」の綴方との関わりは、豊田の「つづり方」に描かれる豊田自身と酷似している。「つづり方」には、綴方と素材、モデルの問題に対する豊田の困惑が描かれている。

また、『女生徒』の素材となった有明淑の日記(註3)もその影響を受けており、当時の生活綴方運動が児童生徒に与えた影響の程をうかがい知る事が出来る。

太宰は、当時の綴方をどのように見ていたのだろうか。作品内からみていくと、「和子」がこのような状況におかれたのは、先に述べたとおり、「青い鳥」に綴方が掲載されて周囲の大人達が騒ぎ出したからである。「和子」の直接的な指導者、小学校の「沢田先生」は、のちに小学校を退職してからは、和子の「綴方」を逆利用した形で押しかけて家庭教師をしている点に象徴的な様に、俗物として描かれていると言えないだろうか。

また、「和子」を常に揺るがす「叔父」も勝手に「和子」を評價し、小説家になるようすすめたり将来を予見したりする存在として描かれている。ある意味で「和子」をパッケージング（ラベル貼り）しているのである。この点から、太宰は当時の一連の生活綴方運動に対して批判的だったのではないかと考えられる。

作品外から太宰の綴方に関する叙述をみてみると、のちに、太宰は、

いったい、この作品（志賀直哉『暗夜行路』を指す 引用者註）の何処に暗夜があるのか。ただ、自己肯定のすさまじさだけである。

何処がうまいのだろう。ただ自惚れているだけではないか。風邪をひいたり、中耳炎を起したり、それが暗夜か。実に不可解であった。まるでこれは、れいの綴方教室、少年文学では無かるうか。それがいつのまにやら、ひさしを借りて、母屋に、無学のくせにてもせず、でんとおさまってけろりとしている。

（『如是我聞』昭和二十三年）

と述べている。この叙述からも太宰の綴方に対する批判が伺えるであろう。

豊田正子の『綴り方教室』は、豊田の作文とその指導経過という報告と評論が書かれているが、いかに大人（教師）の側から引き出していったかが、皮肉にも分かる結果になっている。

豊田は、後に、「綴り方教室を書いた時分——まえがきにかえて——」¹⁴において、当時を振り返り、

たしかに「ひとつ自分で書きたいと思っていたことを、なんでもいから、自由にありのままに書いてもらんなさい」と言いました。

と、述べている。しかし「自由に」「ありのまま」書いた綴方は、指導という教師の手が入るのである。結果、「自由に」「ありのまま」書かれたものではなくってしまっているのではないだろうか。その意味で、綴方は、教師に代表される大人達によって書き手自身が見た現実、現実を表現した綴方を、恣意的に語られ直される、極端に言えばねじ曲げられるのではないか。また、豊田の教師は「みんなだつて書くことを勉強すれば、いままでよんであげたような、すぐれた綴方が書けるようになる」と豊田達に言ったとの記述からは、「すぐれた綴方が書けるようになる」ことをはじめから押しつけられているのである。そのことを豊田は、無意識に感じ取っているからこそ、

人はよく、「作文がうまい」だとか、「綴方が上手だ」とかいう言葉をつかいます。私はそれをきくたび、浮ついたイヤな言いかただと思います。私にかぎらず、生きた、よい綴方を書く子供は、みんなそう思うのではないのでしょうか？

と述べているのではないか。当時の生活綴方運動のある種の胡散臭さ、ある種の欺瞞を、太宰ははっきりと読みとっていた。この意味において『千代女』は、豊田が後に回想することを先見していた。

四 「和子」と作者の自意識——『千代女』と『俗天使』

この章では作者の自意識の角度から作品について考察したい。『千代女』は、「私には何も書けません。」と、書いてありながら、作品として成立したという点で、「何」かを「書け」ている。実際は「何も書けません」という事を書いた小説、書けない事を書く事が出来たのである。『俗天使』の書けない事を書いている作家の語り手「私」と同様である。

『俗天使』の手紙部分の「私」は、どの話題に対しても、「つまらない?」「だめかしら?」と聞く。手紙の「私」は、『女生徒』の「私」と同一にみえながら、もう『女生徒』に描かれるような「女生徒」ではない。そこに表出するのは、相手の反応を伺う、のびのびとしなくなってしまった元「女生徒」の姿である。いつも「つまらない?」と最後に聞かずにはおれないのは、もはや、相手（太宰）の反応を見て、逆に『女生徒』に描かれるような「女生徒」たらんとする「私」（有明）の現れなのではないか。そこには、他者（太宰）の眼を気にし、小説の素材としておもしろい事を提供できるか否かに価値基準がおかれた「私」が表出している。

さらに、「私」（引用された手紙の主有明淑と考えられる）自身がそのことに気づいている様子が記述のどこどこに見受けられる。「やつぱり、つまらない? どうしたのでしょうね。おじさんにも、わるいところがあるのよ。あたし、ときどき、そう思っただけなんです。」「なんだか、みんな自信が無くなっちゃった。」「私は、このごろ、とても気取って居ります。おじさんが私のことを、上手に書いて下さって、私は、日本全国に知られているのですものね。あたしは、寂しいのよ。笑って、いや。ほんとうよ。私は、だめな子かも知れません。」

手紙の「私」（有明）は、自分の日記を素に太宰が『女生徒』を完成させたことを喜ばしく思う一方で、「寂しい」という。『女生徒』に描かれる「女生徒」であり続けようとして、「女生徒」に踏みとどまろうとしつつ、その『女生徒』とは乖離していく自分を感じている。『俗天使』には、つまり、もう小説の題材となるようなことを提供出来ない書けなくなった有明と、小説を書けないといながら、「書けない」有明を小説の題材として書いている作者太宰との入れ子式になっている作品である。

『千代女』においても、「書けない事」「ありのままに書けた」という意味においては、「和子」は小説を書けたのであって、書く事に対する自意識の問題と虚構性の問題について、創作と現実の間の作者の自意識の問題がここでは呈示されている。事実と、小説のあいだ、虚構の度合い、ということに関して述べれば、作者の例えば執筆年や時期を同じくして書かれたエッセイにも顕著である。作家の困惑、楽屋落ち的な創作の裏側を書いて、作品化する、とでも言えるものが書かれている。以下、

いくつか例示してみる。

正直言うと、私は、この雑誌（懸賞界）から原稿書くよう言いつけられて、多少、困ったのである。

（困惑の弁）昭和十五年）

この新聞（帝大新聞）の編輯者は、私の小説が、いつも失敗ばかりで伸び切っていないのを聡明にも見てとつたのに違いない。そうして、この、いじけた、流行しない悪作家に同情を寄せ、「文学の敵」と言ったら大袈裟だが、最近の文学に就いて、それを毒すると思われるもの、まあそういったようなもの」を書いてみなさいと言つて來たのである。

（鬱屈稿）昭和十五年）

なんの随筆の十枚も書けないわけは無いのであるが、この作家は、もう、きょうで三日も沈吟をつづけ、書いてはしばらくして破り、また書いては暫くして破り、日本は、今、紙類に不足している時ではあるし、こんなに破つては、もったいないと自分でも、はらはらしながらそれでも、つい破つてしまう。（略）「私は、こういう随筆は、下手なのでは無いかと思う。」と書きはじめて、それからまた少し書きすすめていって、破る。「私には未だ随筆が書けないのかも知れない。」と書いて、また破る。「随筆には虚構は、許されないのであつて、」と書きかけて、あわてて破る。

（『作家の像』昭和十五年）

このように、結果、作品として書けている点は、書けないといつてその書けない事を、小説として「書いた」「千代女」「俗天使」と同じ手法である。

女性による一人称の独白体の文体では、客体化された「私」を読者は見ることが許されない。語り手の「私」の混沌、あくまでも自己の解釈のもと他の者との関係性が表現されるのではないか。

『千代女』において、「私は今に気が狂うかもしれません。」と「和子」は述べる。本当に狂気の人が、気が狂うかもしれない、とは言わない。逆に『千代女』に描かれている事は、人が一般に経験することではないか。それ自体は特殊ではなく日常茶飯事ではないだろうか。生きていく上で、程度の差はあれ、行動したこと或いはしなかった事を、後悔したりするある種の拘りを持つ事は、一般的な事であり、『千代女』が、病理として「矛盾」「分裂」を描いているとは言えないと私は考える。繰り返しになるが、むしろ問題点は、作者がその状態を書いてあることにあり、作品の主題は、他者の評価に左右され、自己確立に揺らぐ、その揺らいでいる状況を切り取って見せることにあるのではないか。作品の背後に見えるのは鮮やかな物語の作り手、ストーリーテラーとしての作者太宰の姿である。

また、物語の中に物語がいくつもある点も暗示的である。語り手の「私」が作品中の「春日町」や「眠り猫」の書き手、物語作者であるように、そのことを書いてある『千代女』という

小説を書いている書き手（作者）が背後にある。その作者は、例えば『俗天使』のように、書き手が「私」として登場するというように、前面に出てはいない。顕在化はしていないが、ここにも書き手太宰の自意識がある。『千代女』の、「もう、来年は十九です」の年齢を太宰の年齢に、「綴方」を「小説」と捉えても、作品は読みを可能にする。物語作家としての在り様を語っているというもう一つの主題を支える強度を作品は持っている。

五 二人の「かず子」——『千代女』と『斜陽』

また、語り手の名前「和子」に着目すれば、二人の「かず子」——『千代女』と『斜陽』の関連が考えられ得る。『千代女』から、六年後の昭和二十二年、『斜陽』に、再び読者の前に登場した「和子」。「かず子」は、敢然とひとり社会に闘いを挑み、「恋と革命」のためにといって、私生児を産む覚悟をする。『千代女』において、自己確定に揺らいでいた「和子」は、ここでは、もはや揺らがぬ。家の没落、母を弟を亡くすという経験を経、「かず子」は、決然と一人生きて行かざるを得ない。いわば、外的にとことん追いつめられた形で、自立を果たす。私生児を産む、という決意、自立の方法にも、また作者の女性観が示されているのではないか。

『斜陽』の「かず子」は、『千代女』の「和子」が成長した姿だと言えないだろうか。「かず」が平仮名表記になった分、「和子」が持っていた堅さ——未成熟の自我——に柔軟性が加わり、

成長過程における自己確立の危機を乗り切ったとは解釈出来ないだろうか。「和子」は「かず子」として、外的に苛酷な状況下、危ういぎりぎりのところでアイデンティティを獲得したのである。

加えて述べれば『斜陽』は、太田治子の日記が基に成っている。成立事情を鑑みれば非常に『女生徒』に酷似しているといえる。有明の日記同様、太田治子の日記を今度は、作者太宰自らが求め、素材を得て書かれた。少女の造型は有明の日記から着想を得、様々なバリエーションとして他の作品も完成した。語り手が少女ではなく、大人の女性である作品は、『きりぎりす』等あるが、一女性を描く小説『斜陽』を決定的にしたのは、他者の言葉——太田治子の日記——である。日記を物語に変えるという過程によって太宰は、語り手「私」の内的世界の独白で在りながら、語られた以上、外的な他者を意識した物語、フィクションのある種の胡散臭さを顕在化して見せたのである。

おわりに

女性による一人称独白体の作品群の中で『千代女』はどのように位置づけられるか。

これまで述べてきたように、二点考えられる。第一にアイデンティティ確立に揺らぐ少女の言説というモチーフにおいて『女生徒』から『俗天使』を経、「待つ」につながるものであること。第二に、語り手の名前において、『斜陽』に至る前段階の女性を描いたものであるというものである。

他者の評価を与えられた途端、「書けなくなった」少女、他者の評価により、存在が揺らぐという意味においてスポイルされた少女の言説と言える。そしてスポイルされた少女の言説は、書けないことを書いている作者の言説、太宰の自意識の在り方の問題でもある。この自意識の問題は二十世紀の小説の問題でもあり、作家の自意識の問題でもある。その点をいち早く太宰は意識していた点を加え、本稿の結びとする。

註

註1 昭和十七年六月、博文館発行。収録作品は、『十二月八日』

『女生徒』『葉桜と魔笛』『きりぎりす』『燈籠』『誰も知らぬ』『皮膚と心』『恥』『待つ』である。

註2 拙稿「太宰治『俗天使』論」「日本文学誌要」第六十九号 平成十六年

註3 『資料集 第一輯 有明淑の日記』青森県近代文学館協会 平成十二年に拠る。日記には、『綴り方教室』に関する言及が散見される。日記初日には、「これをうんと書いて、安っぽい雑誌でもいい、でる様になればいいな。」

との記述があり、これも当時の生活綴方運動の影響があったというのが私見である。なお、日記は、昭和十三四月三十日から八月八日までのものであり、日記が太宰に渡った経緯は津島美知子『太宰治全集』付録4（昭和二十三年八雲書店）に詳しい。

註4 『綴り方教室』理論社 昭和四十一年

※『千代女』『俗天使』の本文は、『太宰治全集第三巻』『太宰治

全集第四巻』（一九九八年 筑摩書房）に拠った。太宰の随筆の引用は、『太宰治全集第十巻』（一九九八年 筑摩書房）に拠った。なお、漢字は、旧字体から新字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに適宜改めた。

（さくらだ としこ・博士後期課程三年）